

博士論文 要旨

喪の哲学、喪としての哲学

——デリダ思想における死の問題とヘーゲル読解

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻

小原 拓磨

## 序文

中期の主著『弔鐘』は、デリダの思想の前期と後期を分ける一つの到達点である。それゆえデリダの前期思想はここへと収斂してゆくとみなすことができる。本論文はそのようにデリダの前期著作を『弔鐘』へと向けて読み解くことを目的とする。その際「死」の問題系を軸とする。それが「喪」の主題——中期以降の鍵概念——と通じるためである。

第一部にて、一般に知られているデリダの議論から始め、そこに死の主題がどのような仕方に関わり、どこへ行き着くのかを見てゆく。第二部からデリダによるヘーゲル読解をたどりながら、デリダにおける「喪」の問題を明確化する。

## 本論

デリダによる形而上学批判のうち、最もよく知られているものは「音声中心主義」の批判である。それはエクリチュールに対するパロールの優位という伝統の批判である。こうした伝統にあって初めて書字について本格的に論じたのは、デリダの観点ではルソーである。デリダはルソー読解を通じて、言語の誕生を「他者との出会いにおける死の恐怖」として洞察する。デリダによれば、他者への関係と死への関係は唯一つの同じ開けであり、この開けに投げ込まれ、人は言葉を発し始める。こうした運動をデリダは「差延」ないし「原-エクリチュール」と呼ぶ。

言語の発生は同時に「私」なるものの発生でもある。超越論的自我としての「私」の構成の問題について、デリダは今度はフッサールに従いながら考察する。デリダの読解によれば、その構成もまた再び「死」が関わっている。というのも、デリダによれば「私」とは、私自身の経験的実在を踏み越える運動だからである。デリダはこれを「コギト」をモデルに考えている。デカルトの方法的懐疑はデリダの観点ではそうした経験的事実性の一切を超え出る操作である。だがそれは他方で自分自身の有限性を知ることであり、それゆえ恐怖を呼び起こす。そこから日常世界への復帰は神＝理性の助けによって果たされる。すなわち言語の助けである。言語——「われ」の発生——が恐怖を抑制して落ち着かせることになる。

そしてこの言語とは哲学的言説にほかならない。「哲学」とはデリダによればそうした死の恐怖に対する保証と安心感である。言語と「私」が恐怖を前にして誕生するということは、すなわち哲学がそこで誕生するということである。ここから、西洋形而上学の代表と

してのヘーゲル哲学が問題化する。果たして、ヘーゲルの哲学もまた「死」と関係して誕生するのか、あるいはその始源に「死」が見出されるのか。これを本論文第二部で問題にされている。

ヘーゲルにおいて、始まりと終わりはつながっている。起源は結果であり、終わりに至ってようやく始まりに到達する。有名な循環構造である。したがって、デリダは議論の焦点を「絶対知」への移行の契機にあてる。これこそは『弔鐘』におけるデリダの主題である。そして、絶対知への移行の問題とはすなわち絶対宗教（キリスト教）の克服の問題である。それはイエス・キリストを反復することによってである。その死と復活を再現せねばならない。それは言い換えれば「死につつ生き残ること」であり、すなわち死の認識である。死を認識することは、死を直接身に引き受けて現実的に死ぬことではない。私は死なず、「他者」が死ぬ。

他者の死を通じて、私は（私の）死を認識し、また、哲学が始まる。私（言語）の誕生、哲学の誕生の地に、他者の死が横たわっている。キリストの遺体である。すなわち、哲学はキリストの死を媒介にして誕生するだろう。実際、絶対宗教においてはキリストが食べられる（最後の晩餐）。食べることで信徒は神との一体化を成す。ただし、この和解は一時的である。食べ尽くされて儀式が終わった後、その統一は再び分裂する。けれども、他者の死とりわけ「神の死」に触れて自己の死を認識し、そこから退去してそれを言語化することが哲学である。ヘーゲルにおいても実際、神の死の悲嘆において意識は「最も内奥で自己を単一に知る」ことになり、この「純粋な自己確信」こそは「学の根拠と地盤」である。デリダの読解では、そこには死が、とりわけ他者の死が見て取れる。

では、なぜそれについて語るのか。それはキリストが要求するからである。デリダによれば、キリストの言葉は「私を思考しなさい」の意味をもつ。キリストの要求に応じて、キリストについて思考し、語り、それについての言説が産み出される。この言説の体系、記号の体系が哲学である。哲学とはそれゆえつねに存在神論である。そして、ヘーゲルにおいて記号の代表とはピラミッドであり、すなわち墓である。したがってデリダの観点では死者のために書くことこそは哲学であり、哲学とはこの墓の建立、喪の仕事である。これが本論文の結論である。

## 論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	小原 拓磨
論文審査担当者	(主査) 教授 戸島 貴代志 教授 今井 勉 准教授 村山 達也 一橋大学大学院言語社会研究科教授 鶴飼 哲 新潟大学人文学部准教授 宮崎 裕助
論 文 名	喪の哲学、喪としての哲学 ——デリダ思想における死の問題とヘーゲル読解
<p>本論文は、デリダ哲学の基本概念の詳細論から始める第一部と、デリダのヘーゲル読解に踏み込む第二部からなり、全体として「死」の主題をデリダ思想の中枢部に読み取ろうとするものである。</p> <p>第一部第一章では、デリダの伝統的形而上学批判すなわち「音声中心主義」の批判について、デリダによるルソーのエクリチュール論が辿られつつ、言語の起源である「原－エクリチュール」が探求される。デリダは、言語の起源はむしろ動物性と人間性の対立以前のところに関わると考え、それを「《最初の声》を引き出す情念以前の情念」ならびに「欲求以前の欲求」の次元とする。続く第二章では、「私」の構成の問題について、デリダのフッサール読解が考察される。フッサールにおけるエゴとアルテル・エゴの起源は「対話と差異としての言語の起源」であり、この起源と等価の審級である「生き生きした現在」を、デリダは自己の内なる他者へと時間が開かれる絶対的形式とする。また第三章では、デリダによるデカルト的コギトの読解が問題とされ、世界の全体を疑うという方法は「悪魔との戦い、無意味の〈悪霊〉との戦い」であり、コギトの境地は本来的に恐ろしいものとさる。この恐ろしさは「狂気と死のなかで自らが消滅し破滅すること」に由来するのであり、ここからの脱出や日常世界への復帰は言語によって果たされる。そしてこの言語こそが哲学的言説にほかならない。</p> <p>第二部第四章では、ヘーゲル哲学における起源の問題が扱われる。ヘーゲルの体系においては、現象の目的地にして終点である「絶対知」（結果）に到達することが、最初の契機である「感覚的確信」（起源）を産み出すとされる。絶対知はつねに自己に回帰し、自らの始まりを前提し、終わりに至って初めてこの始まりに到達するのである。このデリダによるヘーゲル読解は『弔鐘』におけるデリダの主題ともなる。第五章では、死の認識の問題がバタイユに即して考察され、第六章では、最後の晩餐でのイエスの言葉（要求）——「私を記念してこのパンを食べ、このワインを飲みなさい」——という言葉を「私を思考しなさい」と読み変えるデリダに焦点が絞られる。パンとワインは確かに一つの存立態としてイエスを想起させるが、それらは感覚的事物として消費されるため、イエスを思考し続けることをかえって困難にする。そのようにイエスを忘れさせるものではなく、イエスを想起させつつ、それ自身現に在り続けるような「記念碑」がなくてはならない。デリダによればそれは「墓」である。存在を思考する営為としての哲学とは一つの壮大な墓碑にほかならない。死者のために書くこと、それが哲学なのである。キリストのために書かれた言説として、哲学はそれゆえつねに「存在－神－論」である。かくして哲学とは墓の建立であり、喪の仕事となる。これが本論文の結論である。</p> <p>本論文は、デリダ思想の中心部に「死」の主題を見出し、またそれをもとに哲学の仕事「喪」として規定するという点で、これまでのデリダ研究に新たな地平を開いており、したがって広く斯学の発展に寄与するものであることは疑いを容れない。よって本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	